

---

# 約束

クローバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束

### 【Zマーク】

Z3707Z

### 【作者名】

クローバー

### 【あらすじ】

幼い頃、新一は引っ越しをすることで、蘭と離ればなれになってしまふ。

けれど新一は、蘭と一つの約束をした。、、、、十年後、いよいよその約束が果たされる、、、、！

この話は、空想話です。新一と蘭は、幼なじみといつ設定になっています。

夢（前書き）

久しぶりなので、下手かもしれませんのが、よろしくお願ひします。

夢

「新一！」

「蘭、、、、。」

「新一が、引っ越すのって本当なの？」

「ああ。」

「そ、、そうなんだ。」

「蘭、、、、俺いつか帰つてくるから、、、。それまで、待つてくれるか？」

「で、、でも。」

「大丈夫。絶対に見つけ出すから、、、！」

「、、、うん、、、、、。約束だよ！」

「ああ、、、、！」

瞳に涙を溜めている少女と、真剣な瞳で頷いている少年。八歳だった頃の記憶。一人は、この約束を忘れなかつた。

いの悪いこと、ともかく、やめよう。

―――絶対に見つかる―――

ペペペ、 、

田覚まし時計がなつた。俺は、昔の夢を見た。引っ越しをするちょっと前の、幼い頃の記憶。なぜか知らないが、今日は体が軽かつた。昨日こつち「日本」に、帰つて來たからか？、 、 そんなことばかり考えながら、俺は軽い足取りで、階段を降りた。

、 、 、 、 、 あ。

私は、昔の夢を見た。まだ幼い頃の記憶。自然と涙が出た。あの頃の私にとって、別れとはとても寂しいことだった。けれど、今日見たこの夢は、大切に閉まつて置きたかった。

## 夢（後書き）

第一章読んで下さい、ありがとうございます。  
まだ、新米なので感想、評価よろしくお願いします。

転校生、工藤新一（前書き）

ここに出てくる人物は、実際にはいません。  
では、どうぞご覧下さい。

転校生、工藤新一

今日から、新一は帝丹高校に通うことになった。新一は、一人暮らしで、両親はどちらも外国にいた。新一だけ日本帰ってきて来たのだ。帝丹高校から新一の家までは、あまり距離はなく、歩いても通える距離だった。新一は、早めに家を出て、変わらない風景を楽しんでいた。

蘭は、いつも通りに通学路を歩いていた。ヽヽヽ、といつても、校門の近くまで来ていた。すると、後ろから園子が走っていた。

「うーん…おはよ…」

「おはよ。園子。」

「ちょっと、蘭…今日、転校生来るらしいんだって…それも、外国から！」

園子は、興味津々な様子で話した。聞いていた蘭は、少し呆れた顔をした。そんな話をしていると、後ろが騒がしくなってきた。蘭と園子が振り向くと、一人の生徒が騒がしい中を、呆然と歩いていた。

「ひやー。騒がしい」と。

園子は、騒がしい方を見て言った。

「そ、そ、園子。早く行かないよ。遅刻しちゃうよ。」

蘭は、腕時計を見て慌てて言った。園子は、騒ぎから一度目を放して、腕時計を覗き込んだ。残り五分だったので、蘭と園子は慌てて教室へ向かった。丁度、蘭と園子が席をついたのと同時に、チャイムがなった。

チャイムがなってからすぐに、清水先生が教室へ入ってきた。先生は、教卓の前までいくと同時に満面の笑みで言った。

「今日は、転校生が来るので、紹介します。入ってきなさい。」

ガラガラ、

ドアが開くのと同時に、皆は一斉にドアを見つめた。入ってきた一瞬、教室は静かになつた。本人は気にせずに、そのまま中央まで行くと、静かに正面に向き直つた。

「初めまして。工藤新一です。」

新一は、につつことと営業用スマイルで言つと、頭を下げた。それまで静かだった教室は、嘘のように賑わつた。ある女子は、新一を見ながら放心状態で、違う女子は、キャーキャーと黄色い声を挙げていた。



転校生、工藤新一（後書き）

第一章を見て下さり、ありがとうございました。  
第三章は、思いつきながら書きますので、気長くお待ちいただけ  
と、とても嬉しいです。  
ぜひ感想、評価をよろしくお願ひします。

ふいかで、＼＼＼＼。

新一に向かつて他の女子が、黄色い声を挙げているとき、蘭は頭の片隅で違和感があった。

「「あ、れ、。あの、、どこかで会つた気がする、、、。  
、、、まさか、夢に出てきた人だつたりして、、、、いや、、で  
も、、、。」」

蘭があれこれ考えていると、清水先生は教卓を強く口誌「ノート？」  
」で、叩くと教室は一気に静かになつた。

「えー。工藤は、小学一年生までベイカ町にいたそうだが、引っ越し一年後に両親の都合で、アメリカへ渡つたそうだ。まあ、後の話は本人に聞け。、、工藤の席は、毛利の隣でいいだろう。あと、毛利、隣の席だからいろいろ、案内してやれ。」

「はい。分かりました。」

蘭は、先生からの頼みを笑顔で答えると、先生は違う話をし始めた。新一は、蘭の隣の席に座ろうと、蘭の席のちょっと前まで来た時に、ほんの少しだけ動きが止まり、驚いたような顔で蘭の顔を見ていたのに、気がついた人は、、、園子だけだつた。

、、、先生の話が終わつた頃、チャイムがなり皆は中休みになつた。、、、当然、集まる所は決まつていたのだが、、、。  
中休みになつて、皆は工藤新一の所に集まり、新一は質問の嵐になつた。そんなことは無視した園子は、蘭のところに一田さんに駆け

寄ってきて、小声で切り出した。

「ちゅうと蘭ー。藤君、ちつき蘭のことを見て、びっくりしてたよー。もしかして、蘭に気があるんじゃない?」

「そんな訳ないよー。園子の思ひ込みだよ。」

「本当だつてーだつて、さつきも見てたんだからー。蘭のことー。」

違つ、ちつ、などで言こ争つていたらチャイムが鳴り、園子は泣々席に戻つて行つた。

蘭は、授業を受けながら、新ーのことを考へた。

「「 やっぱり、 、 、 ビーしかで、 、 、 。 見たことが、 、 、 、 。 」」

蘭は、全然授業が身に入らなかつた。

さうがで、・・・。 (後書き)

いつも。クローバーです。

遅れてしまつて、すみません。これからもがんばるので、よろしく  
お願いします。

感想、評価よろしくお願ひします。

第四章もがんばります!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3707n/>

---

約束

2010年10月9日05時35分発行